

山園小梅(林逋)

衆芳 揺落して 独り 喧妍

風情を 占め 尽くして 小園に 向う

疎影 横斜す 水 清浅

暗香 浮動す 月 黄昏

霜禽 下らんと 欲して 先ず 眼を 偷み

粉蝶 如し 知らば 合に 魂を 断つべし

幸に 微吟の 相 押るべき 有り

須いず 檀板と 金尊 とを

衆芳揺落濁喧妍 占盡風情向小園
疎影横斜水清浅 暗香浮動月黄昏
霜禽欲下先偷眼 粉蝶如知合断魂
幸有微吟可相狎 不須檀板共金尊

解説 西湖の孤山のふもとに持っていた園の梅を詠じたもの。

語釈 ※衆芳||多くの馨しい花。※揺落||ゆれ落ちること。木の葉や花の散り落ちることをいう。※喧妍||喧和妍美の略で、のどかで美しい。※風情||自然の美しい趣。※向||向うと読むが、意味は風情を小園に占め尽くしてとなる。※疎影||まばらな枝の姿。※暗香||どこからともなくただよってくる香り。※黄昏||たそがれ。夕方のうすぐらい時。※霜禽||霜を帯びた鳥。一説に白い鳥。※偷眼||ぬすみ目で見る。

※粉蝶||白い蝶。※断魂||びつくりする。※檀板||樂器の名。※金尊||りっぱな酒樽。

通釈 他の多くの花が落ちて枯れ枝となっている時に、梅の花だけが、この小園で風流な趣を独占している。その斑な枝は清い流れの水に斜めに影を映し、月のさし上る黄昏時にどこからともなくほのかな香が漂ってくる。霜を帯びた鳥は梅の枝に下ろうとして、花か霜かと定めかねてあたりを見まわし、白蝶が、今もし美しい梅の花のあふることを知ったならば、恐らくびつくりすることであろう。丁度よくひそかに詩を吟ずる私の声が、この花とよく打ち解け合うから、何も拍子木を鳴らして調子をとったり、黄金の酒樽の酒を飲んだりする必要はないのである。